
笑わない笑子

千嶋桂華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑わない笑子

【Nコード】

N3113P

【作者名】

千嶋桂華

【あらすじ】

「ねえ笑子、僕らそろそろ結婚してもいいんじゃない？」「私達義姉弟でしょうこの野郎。」生まれながら六歳まで育児放棄されて、取立て屋のおにいさんに助けてもらったのにその日常すら小学校卒業までに終わり・・・その上今度は義理の弟と禁断の愛ですって？全く、神様とやらもいい加減にしてちょうだい

義理の姉への愛が重すぎる弟と、えらくシビアで冷静でちよつと天然な姉の、ちよくちよく暗くなるラブコメ
現在更新停止中

プロローグ（前書き）

ふわぁ、こんばんは。小説書くのって初めてじゃないけど、まともに書くのは初めてなんで、変かもしれないですね。上手な文章をお探しでしたらブラウザバックしてください（汗）

プロローグ

ずっとずっと昔から、私はそこに居た。

誰も居ない部屋、誰も来ない扉。

両親はいつまでたっても帰ってこず、それに悲しいとも思わない自分の心も、空に飛んでいったきり帰ってこず。

私の心を連れ戻す人は、もう存在しないと思っていたし、それでいいと思っていた。

だって、最初から何も知らなければ、失うことも裏切られることも傷つくことだって無いんだもの。

それなのに、それなのに。

ある日彼がやってきて、私を外に引きずりだした。

綺麗な空を見せ、楽しそうな笑顔を覚えさせ、人と話す面白さを体験させて。

いろんなものを知って、私がやっと人間になったころ。彼は消えた。灰色の四角い建物の中へしましまの服を着せられて消えていった。私の傍から、居なくなつた。

なんで。ねえ、なんで。

なんで居なくなつちゃうの。なんで、なんで、なんで。

悲しくって苦しくって何がなんだか分からなかった。今度こそ誰も

何も信じないようにしようって思った。

でも、貴方は言った。

「信じた方が楽しいよ。」

差し伸べられた手。暖かい笑顔。

私はまた信じていいの？ 私は貴方に寄りかかってもいいの？

ううん、ダメ。

だって貴方も、そのうち居なくなっちゃうんでしょ？

だったら、私は

第1話 おにいさんがきた（前書き）

いきなり過去です。現代早く書きたいんですけど、先に過去入れとかないと訳わかんなくなるんで・・・（汗）

これからの話で、タイトルが全部平仮名の場合は大体過去話だと思ってください。

第1話 おにいさんがきた

私は、愛を知らないんだろう。

昔、まだ親に甘えっぱなしで許され、人よりも鬼に近かったあの頃。私は両親に捨てられた。

毎日毎日パチンコや競馬に行っていた両親のことは、うつすらとした後姿しか覚えていない。

私が当時のことで覚えているのは、電気を止められ薄暗いままの四畳の殺風景な唯一の部屋と、窓の外を通る白色の新幹線だけだ。

当時、両親は五日に一度くらい食料を置いていくくらいしか家に帰らなかった。それを私は当然のこととして記憶していた。

そのときも既に一週間ほど帰ってこなかったが、まあいつものことだと思っていた。

「邪魔するぞ。」

鍵もかかっていないおんぼろの扉を乱暴に開けて入ってきたおにいさんは、明らかにヤの付く職業の人。幼い私はぼんやりとした頭で両親の犯した罪を考えていた。

「お前ここの家のガキか。」

あの時私はなんと答えたっけ。確か何も言わずに頷くだけだったと

思う。

「ふん……つーか汚えガキだな。お前何日風呂入ってないんだ。」

風呂。今では日課のように入っているそれすら、私は知らなかった。

「フロってなに。」

「風呂って何かって聞かれても……。おい、父さん母さんは何日帰ってねえんだ。」

「なんにち？」

「あー……父さん母さんが帰ってこなくなってから何回太陽が沈んだ？」

太陽、と言われても、我が家は丁度太陽が当たらない最悪の立地条件で最安の物件だったので、私は太陽を数えるなんて発想はなかった。ただ、太陽が沈むと暗くなるということだけは知っていた。

7

「じゅっかい暗くなったよ。」

「十日……お前飯は。」

あれ、と指差した先にはカビの生えた菓子パンが一個。そういえば、あれが最後の食料だったんだ。

「……そうか。普段父さんと母さんはどれくらいで帰ってくる？」

「ばくちとかきやばくらに飽きたら。」

「……。」

今思えば、私はなんとという発言をしていたんだろう。どんなに情に厚くない冷血人間でも、こんな放っておいたら衰弱死してそんな子供は見過ごせないだろう。

更に言えば、このおにいさんは実は情に厚い人間であり、子供好きでもあった。

「じゃあ父さんと母さんはしばらく帰ってこねえか。」

確認された事実には、私は悲しいともさびしいとも思わずに頷いた。むしろ、おにいさんの方が悲しそうで苦しそうで、私はとても不思議だった。

しばらくお兄さんは悲しい目で私を見た後、狭い部屋の中を数回うろつろした後、決意したようにして私のほうを向いた。

「おい、お前銭湯とか知ってるか。」

「せんとつ。知らない。」

「広いぞー気持ちいいぞー」

「ふーん。」

我ながら感動の少なすぎるガキである。私だったらそこで嫌になる。

「お前着替え……持ってねえよなあ……。」

しばらく悩んだおにいさんは、やがて何かを思いついたように立ち上がると、私を置いて家を出て行った。

私はこれを悲しいともさびしいとも思わずに、新幹線を眺める作業に戻った。

『帰ってこない』それは当時の私にとってただの真理であり、特別な感情を抱くに値しないものだった。

それなのに、

「よし、銭湯行くぞ！」

おにいさんは帰ってきた。可愛らしいウサギがプリントされた、おにいさんに世界一似合わないだるう子供服の袋を両手に持って。

第1話 おにいさんがきた(後書き)

こんな暗いガキは嫌だ〜(^o^)/

えーと、過去話基本暗いです。何故なら主人公も作者も根暗だから！

頼みの綱のおにいさんも今はただのチンピラです。

第2話 わらうって何(前書き)

ルルルルルルル (謎)

こんばんは千嶋です。テスト訂正とかで時間が無いのでしばらく更新できません。

第2話 わらうって何

それから、私は家に帰ることは無かった。恐らく両親は逃げたからもうあそこに帰ってくる筈が無いし、もう食料もあらかた尽きていたから。

「おい、しょうじ。」

おにいさんが何か言ってる。

そういえばここはたくさん人が居るから、おにいさんとかお母さんとかじゃなくて、人を名前で呼ぶんだっておにいさんがさっき言っていた。

そうか、おにいさんは今誰かを呼んでるんだ。

「しょうじ、しょーうーこー。」

「お前何ガキなんか拾ってきてんだよ。」

「何って……育児放棄されてんだよこのガキ。」

「育児放棄い？　んなもん腐るほどいるだろうが。ほっとけほっとけ。」

「メシがカビたジャムパン一個しかなかったんだよ。すっげえ汚かったし服も三歳ぐらいのガキが着るもんだっつたしよ。」

銭湯に行って服を着せてもらって、おにいさんに連れて行ってもらったところには、おにいさんみたいな格好をした人がたくさん居た。床はふかふかだし、壁は白いし、たくさん人が居るし。驚いてばかりだった。

「しょうじ、しょうじっ！」

「……あ。」

そういえば、私は“しょうじ”になったんだった。

「なに。」

「いやいや。なに、じゃなくてだなあ……。」

私には、名前が無かった。

いや、本当は在ったのかもしれないし、愛情を込めて呼ばれたことだって最初の一、二ヶ月はあっただろうけど、私は知らなかった。

「しょうじ、お前さっき自分の名前ちゃんと見てなかっただろ……
って頷くなよ。悲しくなるじゃねえか。」

返事をしろと言ったのに、その返事を否定された。理不尽だ。
ストライキおこしてやる。返事なんかするものか。

「おい、しょうじ？ おーい。」

「……うん。」

あ、返事しちゃった。まあいいか。

「あーえーつとだな。お前文字読める？」

今思えば、これはかなりの愚問だ。風呂も日にちの数え方も知らない子供が文字なんて知っているはずもないだろう。

「んーとだな。しょうこっつーのは笑う子供って書いてしょうこなんだ。」

今なら分かる。おにいさんの日本語は破綻している。ついでに言うとなーミングセンスも無い。笑って欲しいからといって安易に笑う子と名づけるのはどうだろう。

「わらう」。 「わらう」。

「そうだ。……お前笑うの意味分かってるか。」

「わかんない。」

「……………」。

ごめんなさい、落ち込まないでおにいさん。元気だして。なんて殊勝なこと、アメーバよりも動かない心を持った当時の私が考えるはずもなく。

「わらうって何。」

無機質すぎる声でおにいさんに追い討ちをかけるだけだった。

第2話 わらうって何(後書き)

お兄さん(及び私)のネーミングセンスに絶望しながら
まゝた来週

第3話 割れた眼鏡（前書き）

はい、ようやくともう一人の主人公が登場

ヘタレ（？）な今時の男子です

笑子がんばれマジがんばれ

第3話 割れた眼鏡

久しぶりに夢を見た。昔々の遠い夢。こんな夢を見るなんて、今日
は何か特別なことでも起きるんだらうか。

そう思い、見回してみはするが……。朝日、めざまし時計、新聞が
ポストに投げ込まれる音。どれもこれも普段どおり、何の代わり映
えもしないいつもの朝。

横にこの家の長男が寝ている以外は、まあ普通の朝だ。

「あれ……しよーこ……？」

「……。」

「おはよう。」

「……。」

私は、おにいさんたちの元を去ったあと、養子に出された。

十二歳である私を引き取るうなんて酔狂な人は居ないと思っていた
が、まあ世の中には存外変な人があふれているもので。

私は、自分より二歳ほど年下の男の子が居る夫婦に、引き取られた。

「しよーこ、起きてる？」

やかましい、独白シーンを邪魔するな。

私が返事をしないのを不審に思ったのか、彼はベッドで寝たままの
私を見下ろしながら頬をぺちぺちと叩いてきた。

「どこまで覚えてるのよこのクズ。」

「いやいやいや。俺そこまで蔑まれるようなひどいことしたっけ？」

「どうやら覚えてないらしい。ならば思い出させてあげよう、自分の恥らしい心を切り殺してでも。」

「好きでもないクラスの子にいきなり呼び出されて『龍一君の気持ちには応えられないけど……これで許して。』なんて意味不明な発言されてついでに初キッス奪われたとかで、夜の繁華街の隅っこの居酒屋で散々飲んだあげく、家に帰った途端に私に抱きつくわ喚き出すわで呆れてたら、突然一緒に寝るだなんて寝言言い出して私に無理やりキス」

「やめて！ 思い出したからやめて！」

顔面蒼白になりながら叫ぶ龍一。いや、普通それは無理やり唇を奪われた私の反応だろう。立場逆転してるってどういうことだ。

「ていうか段々頬が紅潮してきている。何こいつ照れてるなんて馬鹿じゃないの。」

「私がどれだけ焦っていたのか分かっていないようだ。」

「馬鹿。何照れてるのよ。」

「え、いや……だってさあ！」

「私がどれだけ焦ったと思ったのよ。」

「りょうが無理やり私を押し倒そうとしたとき、私ったらついその眼鏡叩き割ったのよ。」

「叩き割った!？」

「火事場の馬鹿力って偉大よね。私普段はペンより重いもの持ったこ

とないんだけど。

って、そんな話はどうでもいい。今は私と龍一の関係が、戸籍上だけとはいえ、『姉弟』以外の何物でもないというところが問題だ。

「これって近親相姦未遂に入るかしら。」

「あああうああ！ ごめん！ほんっとうにごめん！」

「ごめんで済むなら死刑制度なんてとっくの昔に廃止されてるわよね。」

「死刑！？ 極刑を望んでるの！？」

すみませんもうしません、と土下座し続ける龍一。軽くいい気味だと思っただけ眺めていたけれど

……いい加減飽きてきた。

「え、ちょ、何で俺そのまま置いてかれてんの。」

「朝ごはんとお弁当作ってくる。」

「許すか許さないかはつきりしてよ。」

「じゃあ許さない。」

「……。」

ていうか何で龍一が不満そうなのよ。許してもらおう立場の癖に。私はそう言い捨てて、一階のキッチンへと降りていった

第3話 割れた眼鏡（後書き）

まああれだね。

未成年は酒飲むな（、、）

第4話 うけついだもの(前書き)

風邪だよ熱だよ誰か助けて

ハイ皆様おはこんにちばんは！ハイテンションな私千嶋桂華(3

8)です

あれですね、うん。

笑子マジ暗い！もう書きたくないよベイバー！！()

なんでだろうねーなんでこんなに暗くなっただんだろうねー

打ち切りにしたろうかこの話。ていうかしちゃえ

第4話 うけついだもの

「もう、6年たったのよ。」

窓の傍で新幹線を眺めていた私に届いたその声は、私を産んだ女人の声だった。

「ああ？ 何がだよ。」

「ほら、あれが出来てから6年くらいじゃない？」

あれ 私を示すその固有名詞。親が共にこの部屋に居るときいつも耳にする単語。

「あ？ 俺が知るわけねえじゃねーか。んな昔のこと。」

「何よ、あんたの娘でしょ……まあ6年なのよ、6年。」

「だからどうした。まさか入学資金なんかを出せってんじゃないだろーな。」

「当たり前でしょ。学校なんて面倒なところ行きたくもないわ。」

「ならいいけどよお……ぶっちゃんけお前、“あれ”どうするつもりなんだよ。」

どうするつもり、そういえばこれも最近よく聞く言葉だ。言葉の意味は分からないけど、お父さんやお母さんの言い方を聞く限り、良い意味の言葉じゃないんだろってことは分かる。

「どうするって……どうしようもないじゃない。」

「だから産んだときに殺しときゃよかつたんだって。」

「今更言つてもしょうがないでしょ、第一殺してたら私今頃警察行きじゃない。」

「はっ、今だつて育児放棄で十分捕まるだろ。」

「何よ、食事だつてちゃんとあげてるし、屋根のある立派な家だつてあげてるじゃない。」

その答えを聞いた男は突然、窓を見つめていた私の襟を掴んで引き寄せた。

「ま、こいつが将来お前を恨んで死なないように気をつけとけよ。」

私を覗き込んだ“おとうさん”の瞳は、日本人では無いかのような明るいい色をしていた。“おかあさんの”の髪は、染められたものではない綺麗な栗色だった。

この顔は知ってる。窓ガラスに映る私の瞳と髪、まるで混血児のような無駄に高飛車な顔立ち。

受け継いでしまった。あの二人から私は血を受け継いでしまった。

その事実気づいた私は、突然目の前の二人の人間がおぞましく思えて、叫び声をあげながら男の傍から離れた。

何かを殴る音や罵声がしばらく聞こえたけど、私が何も言わなかったらそのうち男と女は居なくなつた。

体中の痛みも気にならないほどにほっとした私は、また窓の外を眺めだした。

それから一ヶ月ぐらい後、私は捨てられ、おにいさんがやってきた。

第4話 うけついだもの(後書き)

暗いよグイグーーーー!!!!!() (黙)

第5話 彼が安心する理由。(前書き)

この話、一回書いたのに怖い画像のせいでびびってブラウザ閉じちまったもんだから消えますた。

自分死ねばいい。いややめとこう。(何

今回のお話は、まあ・・・

龍一 笑子 ですよって話。

第5話 彼が安心する理由。

「ねえ、もし私が死体愛好家ネクロフィリアだったらどうする？」

あれから、まるで何事も無かったかのように一日を終え
父さんと母さんに気づかれてなかったことにほっとし
いつもと同じ時間に風呂に入って、
自分の部屋の扉を開けた僕は

僕のベッドの上で足を組んで座る義姉と目が合った。

朝と同じ服バジャマ、朝と同じ声音、朝と同じ視線
違うのは表情だけ。

めっっちゃ笑顔

なにあれ怖い。まじ怖い。

僕は彼女の微笑みに底知れぬ恐怖を感じていた。

だってあの笑子がだよ？あの笑わない子と書いて笑子が
なにあの口元の歪み、もとい微笑み！

しかも視線はいつもどおり、Everyday could eye .
これがあれか、俗に言う「目が笑ってない」状態か。

「ねえどうする？」

「いや、どうするもなにも……。」

そもそも何処でその単語を知ったんだ笑子。

笑子に悪い情報を知らせないために

ネット雑誌テレビ……全てに置いて監視しつづけたのに。
シスコンと友人に笑われつつも頑張ってたんですけど！

「ねえねえ、どうするの？」

「むしろ笑子のほうがどうしちゃったのさ。」

「ふふふ。」

やだこの子怖い。

僕はそつと顔及び視線を笑子から壁のカレンダーに向けた。

「ねえねえ。」

「……………」

落ち着け、落ち着くんた僕。

冷静に考えろ、何が彼女をここまで変えてしまったのか。

「……………」

「……………」

……………やっぱ昨日のあれだよな。

今のところ、僕に思いつくのはたった一つの過ち。

まあ僕が笑子に　しちゃって　しようとしたらめがね割られた
とかいう

あの悲惨な事件だ。

やばいなーどんだけ怒ってんだろう。

きつと逆鱗に触れるどころか全力で蹴ったくらい怒ってると思う。

いや、僕は何があっても笑子に危害は加えないけども。 比喩表現比

喩表現

「……………」

「……………」

あれからどれくらいカレンダーを見つめていたんだろう。

二ヶ月が約60日くらいあるんだと再確認したぐらいのとき

ふっと僕の傍に気配を感じた。

それと同時に僕の頬に細く冷たい掌が触れて

首を捻じ切るごとき勢いで顔の向きを変えられた。

目の前には笑子。

最早彼女は笑っていない。

「……びっくりした？」

いや、むしろ今のほうが笑っているのか

さっきは普段通りの、何も見てないかのような
ガラス玉みたいな瞳をしていたというのに
今のこの瞳は、なんて綺麗なんだろう。
とても楽しそうで嬉しそうで、輝いている。

「……僕、からかわれてた？」

「そうよ。馬鹿ね。」

この輝きは僕によるものなのかな

動機はなんにせよ、彼女が自分から僕に関わってくれたこと。
更にその結果、普段動かない彼女の表情が動いたこと。

声にも表情にも出さないけど

すごい嬉しい。

きっと彼女に他意は無い。

僕がこんな風に思っていると知ったら彼女は僕を嫌うだろう。

「じゃあネクロフィリアってのは？」

「嘘よ。」

死体愛好家なんて本の中だけの存在よ、なんて

全国の死体愛好家を敵に回すような発言をする笑子に

僕は心から安堵していた。

「……どうしたのよそんなに嬉しそうに。」

「うつん、なんでもないよ。」

僕のベッドの上でそんな格好で無防備に座る君。

何故僕が嬉しそうなのか分かるかい

それはね、僕が君に愛されるために
殺人者にならずにすむからだよ。

だって君がもし死体しか愛せない女性ひとだとしたら

僕は自分で自分を殺さなければならぬじゃないか。

第5話 彼が安心する理由。(後書き)

そつだ、今度から笑子が読む本も見張つところ。

あれだろ、お前らもう付き合つてるだろ。
もういいよ、爆発しろよリア充どもめ。

龍一はですね、大分きm・・・愛が重いですね。
笑子の方が生まれ育ちで心が歪んでそうですけど、
案外普通の子のほつがやばいつてね、そついうもんですよ。

今日の訓戒

検閲はやめよう。したつてどうせ足元くぐられる。

第6話 同類（前書き）

新キャラ登場！

爽やかイケメソ、運動も勉強も出来て気配りも出来るけど歪んでる。
軽度の歪み有ります。

この話に出てくる人って大概歪んでるよね。
何故だろう、作者たる私はこんなにも純粹でまっすぐなのに・・・

第6話 同類

笑子は今年、受験生だ。

これからもっと忙しくなるだろうし、つらい時期にも差し掛かるだろう。

そして僕は去年受験を終え、この高校にやってきた。

やっと、やっと笑子と同じ学校に来れたのに

来年には彼女はまた離れていく。しかも今回は県外へ。

何故今になってそんなことを考えたかというと

それは今朝、その彼女が

楽しそうに僕の知らない男と談笑していたのを見てしまったからであって。

「気に食わない。」

彼女が遠く離れた地に行ってしまうえば

さっきのように僕の知らない人間と彼女が関わることを、僕は止めることができない。

彼女は僕が知らない人になってしまう。

彼女は僕以外の奴のものになってしまう。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

その日僕は、部活を無断でさぼって
早々に家に帰った。

「ありがとう、助かったわ。」

「いやいやー。吉河さんいつも一人で仕事してくれてんじゃん。」

これくらい当然さ、と笑う彼に向かって
私も同じように嘘の笑いを返した。

私は学級委員で、5月にある文化祭の準備を
一人先生に頼まれ、放課後に教室でやっていた。

最初は私一人で全てやりきってしまったおうと思っていたのだが、思ったより量が多く、見かねたもう一人の学級委員である水瀬君が、私と一緒に居残って仕事を手伝ってくれた。

今日は見事その仕事が終わり

先生と生徒会にその資料を渡しに行っていたのだが

「……りょう？」

視界の端に、義弟が走っていくのが見えた気がした。

「どうしたの？」

「いいえ、見間違いだったわ。」

見間違い等ではない。

一瞬しか見ることは出来なかったが、あれは龍一だ。伊達に5年ほど一緒に暮らしてるわけじゃない。

「またかな……。」

私の接し方がまずかったのか、龍一の性格が元々ああなのか彼は私に酷く依存していると思う。

依存、というか過保護なのだろうか、あれは。

私に敵意を向ける相手も、好意を向ける相手もむしろ私が人間としての好意を向ける相手ですら全てが全て、彼にとっての敵らしい。

彼の論理を頭っから信じるのだとすれば、私と関わっていい人間は

彼と、私と彼の両親、のみ。
実に窮屈だ、自由にさせると抗議すると
龍一はいつも私に文句を言う

『笑子が危なっかしいのが悪い!』

間違はなくあっちのほうが悪いと思う
第一私の何処が危なっかしいんだ。

「あれ義弟君ていひんだよ、帰るのかな。」

こういうとき、水瀬君は実に目ざといと私は思う。
私ですら視界の端にとらえただけなのに
彼はしつかり龍一を見つけていたようだ。

「そう・・・ちよつと過保護な義弟。」

「過保護?どんな風に」

「・・・シスコン?」

そう言うと彼は大きく笑って

俺ってば夜道に気をつけなきゃなんねえ感じ?と聞いてきた。
私は、その言葉にも嘘の笑いを返した。

嘘と嘘の応酬。私達が2年生の夏から続くこの戦いは
今のところ2対0で私の勝ち。

私は彼の本当の笑顔を見たことが有り
彼は私の本当の笑顔を見たことが無い

最初に笑顔を見られたとき、彼はとても悔しそうにして

いつか私の笑顔を見てやる、なんて言っていたけれど結局次に本当の笑顔を見られたのは、またしても彼だった。

だって当たり前でしょう。

私は学校で、笑ったことなんて無いのよ

彼　　水瀬くんは、俗に言うイケメンだ。

運動神経もよく、勉強も嫌味でない程に出来、よく気が利いて周りを大事にする。

笑顔が素敵と言われている彼は、確かに他の人と笑顔の質が違う。とても格好良く、輝いていて、嘘臭い。

実際、彼の笑顔はほぼ全てが愛想笑いだ。

私が彼の笑顔のあまりの薄っぺらさに疑問を感じ

彼に聞いてみた、あの春の日差しがそろそろ暑くなってきた午後、彼は今と同じように大きく笑いうそがき

「吉河さんだって俺の仲間じゃん。」と言った。

ほら、その笑顔。すごい偽者っぽい。何で嘘つくの？

吉河さんってば絶対心から笑ったほうがかわいいよー

ま、俺も同じ穴のむじなだから言えた口じゃないけどさ。

怒涛のようにつむがれる言葉の波に

危うく笑顔が流されるところだった。

今まで気づかれたことなど無かった、この笑顔。
都合の良い、仮面^{えがめん}

どうしてそんなに簡単にはれたの？と聞くと彼は
少しかだけ本物の笑顔を混ぜた偽物笑いで
同類だから、と囁いた。

第6話 同類（後書き）

あーもういいよ水瀬が主人公で。

龍一暗い。マジ暗い。つかキモい

大丈夫かなーこんな主人公で。

龍一にはもう少し自分に自信持つて欲しいんだけど・・・
となると笑子と龍一が引っ付いちゃうとだめなんだよね。
いや、引っ付いてもいいんだけど・・・。

いっそのこと、一旦笑子と龍一が付き合いーの
別れーの、立ち直りーの、別の人と付き合いーの
くらしいしないと龍一はつよくなれないと思う。

笑子とくっ付いたままだと笑子に甘え続けると思うんだ。

そつか！笑子が弱い女になれば嫌でも強く・・・いや無理だ。
か弱い笑子とか何それ平行世界パレルワールド

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3113p/>

笑わない笑子

2011年10月8日12時28分発行